

Contents

- 02 目次
プロローグ Vol. 24
- 04 特集 中南米
日系社会とともに歩む
 - 06 中南米を知る
 - 歴史を紡ぐ中南米と日本
 - 08 1世が開拓した農場を4世が守り、次世代へ 멕시코
 - 10 移民の歴史を未来に伝える ブラジル
 - 日系社会と深まる交流
 - 12 高齢者ケアの最前線で活躍 パラグアイ/ブラジル
 - 14 日系病院の連携で社会全体の医療の質を上げる ブラジル
 - 中南米と手を携えて
 - 16 防災ネットワークの拠点に チリ
 - 18 三つのステップで貧困から“卒業” ホンジュラス
 - 20 ウェブで広がる学び合い
 - 22 旅人・たかのてるこさんの中南米★写真紀行
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 23
グアテマラ
- 26 世界につながる教室⑫
映像の力で、興味を引き出す
- 28 地球ギャラリー Vol.145 ウズベキスタン共和国
写真・文●鈴木 革(写真家)
歴史ある“若者の国”
- 34 教えて! 外務省
知っておきたい国際協力⑳
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 読者の声、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol.25

*掲載されている情報等は取材当時のものです。



中南米を中心にした日本の移住の歴史と日系人の今を学べるJICA横浜 海外移住資料館(写真:小西威史)。



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

プロローグ Vol.24

日系、 そしてその先に

文・セルジオ越後

私は日系ブラジル人2世としてサンパウロで生まれ育ちました。日本からの移民はその頃、サンパウロと同州に隣接するパラナ州に多く暮らしていたのです。今は日本企業が数多く進出したこともあり、生活圏は他の州や都市にも広がって、ブラジル全体で約200万人前後の日系ブラジル人が暮らしていると推定されています。

日系ブラジル人の結束は強く、県人会なども組織してともに助け合って生きてきました。ただ、3世、4世の時代になってきた今、日系人コミュニティのつながりは以前ほど強くなくなってきているようです。かつては、イベントやお祭りを開くと大勢の日系人が参加し、とても盛り上がりました。4世ともなると、自分たちは日系移民であることをあまり意識せず仕事や生活をするようになっていきました。日本語を話さない親もいますし、日系人としてのアイデンティティが薄くなっていく若者も増えていきます。ブラジル人やほかの民族の人と結婚し、社会的なつながりも外へ外へと広がっているのです。

時が経てば、それは当然のこと。日系ブラジル人だけではなく、ポルトガルやドイツなどほかの国からの移民も同じ状況にあります。日系移民であることの意識が薄まるのは、ブラジルとの距離が近づいている証しですから、いいことだとも言えるでしょう。

日本とブラジルを行き来しながら仕事と生活をするなかでよく考えるのは、たがいの国がよりよく近づくためにはどうすればいいかということ。大切なのは、自国のやり方を強要せず、相手国の習慣や文化を尊重することでしょう。「日本ではこうだから」とブラジルの習慣や文化を拒否するのではなく、両国の習慣や文化を上手に融合させ、たがいに納得するかたちで物事を進めていけばいいのです。その姿勢は、たがいの国の本質を見極めることにもつながります。

そういえば、サッカー教室を長く開催してきたのですが、日本では子どもが自分のボールを持っているのは普通です



イラスト●中村知史

ね。だから、日本の子どもはリフティングがとても上手。でも途上国の子どもたちはみんな一つ一つのボール。いつも取り合いです。途上国の子どもはボールのパス能力やキープ力がとても高い。どちらも必要な力ですが、こんなところにも違いがあります。

ではそこで、たとえば途上国の子どもたちがポロポロのサッカーボールで遊んでいる様子を目にした先進国の団体が、新品のボールを贈ったとします。もちろん、それは喜ばしいことですが、子どもたちが本当に必要としているのは学校です。教育を受けることです。子どもたちは学校に行けない事情があるからストリートでサッカーをして遊び、ボールがポロポロなのは家が貧しいから。新品のボールを与えると、ますます学校には行かなくなりそうです。もしも学校に行けるなら喜んで通うでしょう。鉛筆がすり減りなくなるまで勉強するはず。だから、ぜひ子どもたちには学校を建ててあげてほしい。国にとって必要な人材を育成するのは時間がかかることですが、20年、30年経って、教育を受けた子どもたちが豊かな知識を持った大人になり、仕事に就き、貧困から抜け出したとき、その国はもつと強くなると信じています。

一つ、私にアイデアがあります。子どもたちの教育の一環として、サッカーでも野球でもよいのですが「JICA杯」を創設するのもおもしろいですね。企業などにスポンサーになってもらい、勝ち進んだら日本に招き、日本の子どもたちと試合を行うのです。スポーツはとても素敵な交流の手段だと思えます。日本と途上国の子どもたちの交流は日本の国際協力の存在感をいっそう高めるでしょう。

私は日本とブラジル双方のアイデンティティを持ち生きてきました——続く世界の子どもたちがさらに多くの国や民族と豊かな交流をすることは、国を超えた国際人の意識を育むことにも力を発揮すると思えます。

セルジオ越後(セルジオ・えちご)

サッカー解説者。1945年、ブラジル・サンパウロ生まれ。18歳でサンパウロの名門クラブ「コリンチャンス」とプロ契約。ブラジル代表候補にも選ばれる。72年に来日し、藤和不動産サッカー部(現・湘南ベルマーレ)に所属。78年より日本サッカー協会公認「さわやかサッカー教室」(現・アクエリアスサッカークリニック)の認定指導員として全国の青少年のサッカー指導にあたる。2006年、文部科学省生涯スポーツ功労者表彰受賞。13年、日本におけるサッカーの普及を評価され外務大臣表彰を受賞。17年、旭日双光章受章。HC栃木日光アイスバックスシニアディレクター、JAJA日本アンブティサッカー協会スーパーバイザーとしても活動中。